

Title	二、フィリップ二世の性格に関する新研究
Sub Title	
Author	平山, 榮一(Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.96- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	海外史壇紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0096">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0096</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いて詳論した。Leopold Wenger はペルス文書に現はれた法理論を紹介し、Koschaker はアラビヤ語ペルス文書によつて、アラビヤに於ける婚姻締結書式のビザンツやコプティック・ペルス文書のそれと何等關係のないことを明にした。文學史についてはブダペストの Kerenyi によりギリシヤの小説が扱はれ、宗教史については前述の神につく奴隸や初代基督教會のやうな問題の他、ノールウェーの S.Eitrem により σπουδὴ μαθήσος の觀念について論せられた。考古學については、アメリカのロルト調査隊の南ペルスチナに於けるビザンツの建築の發見とボーランデ人 Manteuffel の Edfu の發掘が報告され、又オックスフォード郊外の Chedworth に、後二〇〇年頃のローマの別墅の跡を訪れるために、大會の遠足が催された。居館や經濟的用務に供された建物の趾によれば、これは仲々立派なものであり毫も文化的衰退を示して

ゐない。殊に注目すべきは、經濟的目的のために作られた種々な暖房裝置である。すくては飾氣のない灰色の石が用ゐられてゐるが、これは現在もオックスフォード郊外の町々の地方色の基調をしてゐる建築石材と同じものであるやうに思はれる。

## II、フイリップ二世の性格に關する新研究

平山榮一

Revue historique, Tome CLXXXIX, Avril-Juin, 37.  
Memoires et Études 所載 Léon-E. Halkin 出の繪文 La physionomie morale de Philippe II, d'après ses derniers biographies.

スペイン王フイリップ二世は史上の最も異論ある大人物の一人である。彼の名をめぐつて過去二百年來展開された論戰は、少しも彼の名聲を擧げ、或は神祕的な威嚴を加へることにならなかつた。

チャールス五世とポルトガルの一王女との間に

生れたフィリップは、一五四三年十六歳にして攝政となり、十二年後父王をついで王位に上り、その治世は十六世紀末年に及んだ。歿する直前に彼はなほヨーロッパに於ける最强のカトリック王であり、スペイン王、ポルトガル王、兩シシリー王、ネーデルラント、フランシュコンテの主權者、イギリス及びフランスの王位の要求者、世界最初の植民帝國の支配者であつた。その部下の勝利はフランスをサン・カンタンに、トルコをレバントに撃破した。彼の配慮によつて建てられた壯麗なエスコリアルの王宮は今なほ彼の治世の光輝を證するものである。

フィリップ二世に關してはこれまで多數の著作がある。古い刊行物の中で注意されるものは、Louis-Prospere Gachard の巨大な記録の公刊（一八四八—一八五）であり、それはフィリップ二世に対する是非の論議を廣い知識から科學的に訂正したものである。

ものである。近代の史家については一余は特に傳記作者の場合に限定する——の主要なる傾向が容易に區別される。一は要するに一般的の意見に組してフィリップ二世に賞讃を與へるものであり、他は現代の一名譽回復を好む一傾向に應じて大膽にも王の辯明をなさんとするものである。前者では Jean Cassou, David Loth 及び Alfred-Fabre が擧げられ、後者では Charles Bratli, Julien Juderias, Fernandez-Montaña, 最後に Louis Bertrand がある。要するに研究の現在の趨勢は、全體的にはフィリップ二世に對して同情的であると言ひ得る。

ものが多い、例へば『フィリップ二世は恐るべきものであつた……』などゝいふのである。

フィリップ二世に關するこの恐るべき風評は彼の時代から始まつてゐた。王の宗教政策は、彼をして如何なる犠牲を拂つても、基督教の統一を擁護せんとなさしめた。スペインに於けるユダヤ人、ムーア人、ルーテル教徒、オランダに於ける乞食黨、イギリスに於けるプロテスタンント、フランスに於けるユグノー、地中海に於けるトルコ人、これらは、王が王の如く考へ王の如く信せしめんことを聲明せる手前、許し得ない敵であつた。王の生前に、王に關する『暗黒なる傳説』を固めこれを盛んならしめた者が二人ある。オランダの叛徒の首魁オレンヂ公ウイリアムは、フィリップ二世に關し描寫を試みた最初の人で、彼の『辯明(apologie)』は王を非難して、畫間のお怪け(démon du Midi 詩篇九一ノ五、六)、あらゆる罪の犯行

者、といつてゐる。これより程なくして、フィリップの大臣たる Antonio Perez は王の根深き敵となり、パリで『祕史(Relations)』を公刊し、ヨーロッパを動かした。Perez はその中で最も露骨な申立をなし、みづから王の非行の目撃者たりしことを誇稱した。それは明かに反對黨の作物であり、史的價値に乏しく、イギリスのエリザベス及びメデチのカザリンが彼に對する同様の誹謗を宣傳しつゝあつた間のみ成功を得たに過ぎなかつた。

降つて後世の人々は、スペインを除いては、フィリップ二世に對して不誠實たるを示した。特にオランダでは、グラント・エラの不人氣とアルバ公の過激政策のために苛酷に非難せられ、イギリス、フランスでも喜ばれず、法王廳に於ても辯護されなかつた。宗教的或は國民的偏見に充ちた著作家の多數は彼に對して誹謗的批評のみを向けた。史

學の世紀たる十九世紀も、全體からみて彼に好意をもたなかつた。最後に現代となつたが、前述の諸家中で最大の反響をもつたものはデンマーク人 Bratli の説で、學界の賞讃を博した (Charles Bratli, Philippe II, roi d'Espagne. Étude sur sa vie et son caractère. Paris, 1912)° また Louis Bertrand の諸著は、常にフランスのアカデミーの學者に従はんとする大衆にまで眞にカトリック的なカトリック王の所信を擴めた (Louis Bertrand, Philippe II à l'Escorial. Paris, 1929; Philippe II et Antonio Perez. Une ténébreuse affaire. Paris, 1929.)°

極めて學的なる Charles Bratli は、獨創的證明を行はんとの熱心のねむり、無意識に彼の英雄の功績を誇張し、その性格の弱點をも覆つたことが認められる。彼の治世の最も暗黒な事件たる政治的暗殺も『最高の利益たる、教會及び國家の運命』と言葉によつて辯明せられ、フィリップは『彼

の理想の殉教者』となつてゐる。戰前のカトリック的なスペインに於てかかる書が成功を見たことは想像され、同國の一人の著作家は彼の説を更に發展させた、即ち Julien Juderias の『暗黒なる傳説と史的眞實』(Le légende noire et la vérité historique) 及び P. Fernandez-Montaña の『ハイリック・慎重王とその政策』(Philippe le Prudent et sa politique) であり、共に一九一四年に現はれた。

次いで Louis Bertrand が魅力ある文體を以て、彼以前に辯護された意見の文學的普及者となつて現はれた。マルトランの判斷は、專制主義を希望する彼の政治的意見によつて影響されてゐることも極めて明白である。マルトランのフィリップ一世に同情する結果たる結論の誇張は別とするも、彼の史學的方法の上の誤謬は見逃せない。彼はオーリナルなものと信頼する原本に確信をもつて、フィリップ一世の歴史を史料より得たといふこと

を告げんとしてゐるが、一方に於てその先人の業績に就いては沈黙し、プラトリサへも知つてゐない。さてフィリップはベルトランにとつて『聖者に近き人』であり、エスコリアルの修道院は彼の敬虔の完全なる鏡であつた。彼は『謙虚』であり、『決して疑惑も不安も知らず、彼の良心は完全に靜穏であつた』。最後にフィリップに於て『人類に全く卓越せる一の型が輝いてゐた』と。

かくの如き評價をば、我々は厳格な批判に訴へねばならない。フィリップ二世に關し、何の黨派にも組せずして問題を明かにせんとする人は、その著作家の間の多くの撞著に困惑を感じる。フィ

リップ二世は聖者か遊蕩兒か、確信の人か疑惑深き政策の人か、輝かしき智性の人か凡庸な事務家であるか、天才か墮落者か、基督教徒の王か傲慢なる暴君か？これらの意見はすべて辯護されゐる。彼に對する誹謗者達をその追従者と同様に

疑ふべき充分の理由が存するとき、彼の性格を分析するのが困難だといふことは事實である。先づこゝに、王の生涯とその治世の成熟期に於て描寫のスケッチを試みることにしよう。

先づ Antonio Moro, Titien, Pantoja de la Cruz の如き畫家が見た王は如何に。フィリップは美しい人ではなかつた。丈が低く、面長で、濃いブロンド色の頭髪及び鬚を有し、大それく見開いた眼、真直ぐな鼻、ハップスブルグ家の突き出た顎をもつた、厚い口をもつてゐた。その全容には權威の支配者的感覺、嚴正の好みと秩序の愛がうかゞはれる。

さて醫師の證言を聽く。しばしばフィリップ二世は變質者であり、『王冠をつけた狂者』である、といはれたが、これは是正を要する偏見である。王の直系親は血族結婚、精神的障害、種々の病氣などによつて弱められてゐたが、この繼承の負擔

はフイリップが、七十歳を越すまで國事の支配を他の者に委せずにおなことを妨げなかつた。〔三〕の場合にフイリップ二世自身の極めて輕微の神經衰弱が注意されるに過ぎない。有名なハプスブルグ家の變質は彼より以後に起つたものである。

次に彼の性格の検討にうつらう。フイリップは最高の意味に於てカトリック王であり、改革者であると望んだが故に、彼の信仰と道徳を觀察しようと。フイリップ二世の理想は、宗教的主權者たる就いてのカトリックの觀念を熟知するにあらざれば、公平に彼を評價することは出來ない。フリップを宗教の問題に於て偽善者たる如く述べるのは、大なる誤謬であり、彼を誹謗するものである。豪膽に缺けた彼の精神には、宗教的眞理に對する疑惑の影が決して差し込まなかつたといふことは、眞實と思はれる。宗教的確信に對する彼の完

全な眞摯さは、勞役と煩悶とに充ち、樂しみの乏しい彼の永い一生のみならず、彼が最も甚しい肉體的苦痛に耐へた英雄的忍耐と、完全な諦觀を保證した。」(R. Baumstark, Philippe II, roi d' Espagne, traduction de Godefroid Kurth. Liège, 1877,

p. 187—Baumstark は恐らくブランティの先驅者なりと考へられる。) 彼の宗教的感情の深さが最もよく示されたのは、恐らく彼の子 don Diego の死の場合であつた。彼は樞機員グランヴェラに書き送つて曰く、『これは最近に起つた何よりも恐るべき打撃である。しかし私は我が主に對しなすることを選び給ふたすべてのことに賞讃を捧げる。私は神の意志に従ひ、神がこの犠牲に満足し給はんことを懇願する。』フイリップ二世の眞摯なる情は、その身の上を瞬時も忘れなかつた臣下に對して盡くし度いといふ慾求に、更によく表はれてゐる。王の尊嚴は神の設け給ふたところであると考へ、王

は神の代理者であり、王座を守ることは祭壇を守ることに等しい、と考へた。アルバ公はメヂチのカザリンの前に於て、王に就いて公言して曰く、『王は異端者の上に支配することを承認せられるよりは、王位と生命を失ふことを望まれるであらう』と。彼はエスコリアル修道院の隠退所に於て、全くの孤獨となつて勤行を伴ふ敬虔の行爲に身を委ねた。彼は一修道僧として宗教的祭式に列席した。禁慾と神祕の誓を守る彼の私室に於て、Jérôme Bosch の七大罪と最後の審判とを示す繪が掲げてあつた。彼が肖像畫を描かせるとおは、神經痛のする指の間に數珠を爪ぐることを好んだ。

フィリップ二世の道德性については、詳細にわかつて彼を非難する話の多くのものが疑はしき限り、知ることは出來ない。彼の生涯の一時期に於ける濫費は信じ難くない。しかしチャールス五世が私生兒や寵姫を祕しなかつたのに比すれば、彼の子はもしそれがあつたにせよ、誇示することはなかつたのである。彼の苛酷なる所爲だけは、少くとも議論の餘地が無い、と人は考へるであらう。しかしそこにもまた問題がある。フィリップ二世は無情な怪物<sup>モンスター</sup>、飽満を覺えたエゴイストではなかつたのである。彼の子ドン・カルロスの悲劇的な最後を以て彼は非難されるまでに至つたが、この暗黒な事件に於てフィリップの咎められるすべては、たゞこの不肖の子に對し國家の理由の名によつて、親身の父が課したる恐るべき幽囚といふことのみである。常に王はその子供達に對して優しき情愛をあらはした。彼はその稀な旅行の一より、子供達に向かつて、手紙を書き愛情に満ちたり、單純にして人間的な言葉を與へてゐるのが何よりの證據である。(L.-P. Gachard, *Lettres de Philippe II à ses filles* (1581-1583). Paris, 1882.) 彼がく

は、彼の心を支配した帝國とその責任の意識が彼をとどめてゐたからである。

フイリップ二世の政治を特色づける暴力行爲は、王の子供達へ示した愛情と一致し難く思はれる。しかしさうではない。フイリップは騒亂の鎮壓に、植民的遠征の如き手段を用ひて、責任の義務を行つたと信じたのである。自己の使命の重要性を極度に懸念した彼は、當時の刑罰制度が提供した厳格なる處置を無節制に用ひたのである。彼が残酷なる性質を、聊なりとも有してゐたと信ずることは出來ない。フイリップには聖テレーザの書を読み、孫女に花をおくる性質があつたと共に、異端者を焼き、ムーア人たるとフラマン人たるとを問はず『蠻人』を罰する性質があつた。

フイリップはマドリードをヨーロッパで最も莊重なる都となし、エスコリアルを敬虔なる牢獄、言はゞ聖者の遺物の博物館となした。彼は支配者

に勇武な外見を與へる威嚴を缺き、辯舌も騎士、狩獵者の技も無く、チャールス五世が誇りとした闘牛者の能力も有しなかつた。その代り彼は藝術方面に優れ、學藝保護者たると共に博物館の保管者となり、エスコリアルには、當時の驚異たりし多數の財寶が蒐集せられた。

フイリップ二世の生活は平坦であり、異常な事件を喜ばず、豫想外の事は嫌つた。彼の引込み勝ちな習慣は旅行を好まず、戦鬪に加はることはなかつた故に武器を愛しなかつた。また彼は、孤獨な私室に於て、徐々たる、勞苦多き省察をなすことを妨げるところの談話を好まなかつた。かくて王はみづから選んだ密室に於て、終日たゞ外交書信を檢し、公文書、手紙、請願書に註記することに努めた。彼は權力をふるふよりも、書き物を樂しみ、休み無しに、政治、言語學、道徳などあらゆる種類の問題に關する評言を書きなぐつた。彼

は記録を読み、且つ書いて自問自答した。すべて自身で行はんとする落着き無き要求の下に、すべてに對して仔細にわたる批評を加へた。彼は報告に對して推論し、大臣の通牒に添書を加へつゝ、決斷の時を失ひ、起ころる事件にも加はらずその経過を導くことも出來なかつた。フイリップ二世は文書學者、王位にある書記官以外のものたるべきであつた。彼は政治の祕密の中にあつて茫然自失せるらしく、彼の眞の缺點は『すべてを見ることが出來ても、如何ともなし得なかつた』ことである。

彼に野心はあつたが、不幸にして決斷力がなかつた。すべてに對しあまりに細心な配慮は、迅速なる發動を妨げた。彼はメリー・スチュアートの保護のため適時に干渉することが出來ず、エリザベスへの「無敵艦隊」の派遣は時機おそきに過ぎ、フランスのカトリック同盟への援助は極端なる行

動のため名譽を損した後であつた。

すべての公務を彼一人のみの集中された精神活動の中に限り、彼自身でそれを轉向せしめんとし、絶えず待機してゐた結果、常に好機を逸し、それが最も重要な事態の下に於てさうであつた。かくして、恐らく、ドン・カルロスを數年の間沈黙の中に觀察することをせず、迅速に活潑に彼の上に働きかけたならば、彼を救ひ得たかも知れなかつた。またオランダに對しては、あまりに早くアルバ公の苛酷な手段に依頼せず、またあまりにおそくドン・ファンとの和解の手段に頼らず、始めからその地に彼みづから赴くことを決意してゐたらば、これを征服し得たかも知れぬ。グランヴァラ自身もその主に對してかく言はざるを得なかつた『すべての事に於て、彼の唯一の決斷は、永久に未決のまゝにあつた』。フイリップ二世はその敵オレンヂ公ウイリアム、また彼の異母弟ドン・フ

アンまたは最良の軍人たるアルバ公にも比せらるべき活動の人ではなかつた。

フィリップは自己の權力に極めて嫉妬深く、部下の武勳を忌んでこれを罷免せることもあり、王の最も悲しむべき性質は實に嫉妬、冷酷であつた。されどこれらすべての缺點は彼の義務の念及び基督教的理想と分離し難いが、思ふに、一の意識の病、即ち平凡ではあるが主權者にとつては恐るべきものとなるところの懸念症(scrupule)によつて説明せられる。これは彼を王に相應せざる、愚かしき勞苦に導いた。その惡結果が、フィリップを外見的な靜穩にも拘らず、理由無き不安を抱かせ、劇發事を恐れて行動を緩慢ならしめ、偽られることを警戒して疑ひ深からしめ、他意を容れざる者となし、最後に不幸な人とならしめた。彼は瀕死

11世は Pierre Janet の言へる如く『精神的反芻』に悩まされ、一事について調査を繰返へし、考へ直し、策謀した。フィリップはこの懸念症を自覺したらしかつたが、王なればこそ改むるに困難があつた。彼を變化させるには善き理解ある懺悔僧があれば足りたが、不幸にして三名ともそれらを得ては失つた。

かくてフィリップの性格を知る鍵となるものはこの懸念症である。彼は怪物モンスターでも、聖者でもなく、たゞ義務の人であり、小心翼々として眞摯であり、多くの困難に煩はされ、凡庸な智性の域を越えられなかつた人である。このため王は小策を好み、大事業に不可缺な統一的支配力を得られなかつた。

彼は支配の才幹を缺いてゐたが、環境は不幸にの病床にあつて『私の病苦よりも私の罪の方がはるかに多く私を苦しめる』と言つた。フィリップ

も彼を專制君主に押し上げた。憲法の存せざる國に於て彼は恐るべき王の獨裁の權化となつた。信

仰の自由の存せざる時代に於て、彼はあらゆる嚴酷さを伴ふ國家の宗教を體現したのである。この堪へ切れぬ重荷を負つた彼は憎惡よりも憐愍に價する第一の犠牲者たるのであり、專制政治と神裁政治の奴隸たるのであつた。

フィリップ二世はチャールス五世がユステの修道院に引退して以來、父帝の事業を繼いだ。宗教の問題に於て彼は父の模範より更に敬虔で、カトリックの信仰を守るに更に執着した。彼は眞にフランス王聖ルイを模倣せんとしたが、結果に於ては、謙讓にして平和的な聖ルイに比して、偏狹な、不安に満ち、冷酷なる王たるの印象を與ふることになつたのである。

### III. 佛獨に於ける戰爭責任問題

田中 荆三

該委員會はフランス革命が人民投票を紹介した  
Review, Vol. XLIII No. 2.) によるものである。